

第一ヨハネ 5 章です。テーマは、神の命を経験するというものです。この手紙全体のテーマは、神様ご自身を経験すること。個人的に、人格的に、神との交わりを持つというものであります。1 章 1～3 節を振り返って欲しいと思います。『¹ 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのこばについて、² このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。³ 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。』生ける言葉、受肉された言葉であるイエス・キリストと私たちは、日々会話をすることが出来ます。この方に触れることも出来ます。使徒ヨハネが、受肉された神イエス・キリストと共に生活し、寝食を共にし、最後の晩餐の席ではイエスの^{ふところ} 懷に抱かれるように座席に着き、神の鼓動を聞くことができたように、私たちもこの命の言葉であるイエス・キリストとそのような交わりを持つことが出来ます。そのような体験を私たちもすることが出来ます。この手紙はシンプルなアウトラインとして三分割されるということも何度も皆さんにはお話してきました。1 章 2 章は「神の光を経験する」という内容です。3 章 4 章は「神の愛を経験する」という内容で、そして今日見るテキストの 5 章は「神の命を経験する」というものです。神の命、言い換えればイエス・キリストの命というものです。イエスと全く同じ命、イエスと全く同じ人生。地上におけるイエス・キリストの歩みは聖いものでした。試練もありました。誘惑もありました。しかし、イエス・キリストはそれらすべてに勝利され、そして神の栄光を現わすために生涯貫いたわけですから。自分のためではなく、他者のため、神の御心を行うためにイエス・キリストの生涯は捧げられました。それと全く同じ命を、全く同じ人生を、イエス・キリストを信じる私たちクリスチャンも、神の子どもとされた私たちは共有出来るのです。同じ体験が出来るのです。イエスが歩まれたように私たちも歩むことが出来るのです。誘惑に打ち勝つことが出来るのです。試練を乗り越えることが出来るのです。あなたはもう弱くありません。確かに肉においては弱いですが。しかし、あなたの内にはこの神の命があるということを、もう一度この 5 章を通して覚えて欲しいと思います。

1 節から見て参ります。『¹ イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。』イエスがキリストであると信じる者、それは私たちクリスチャンのことです。クリスチャンならば、誰でも神によって生まれたのです。私たちは、神によって生まれた者です。新しく生まれた者です。上から生まれた者です。英語で言えば born again したということです。これは奇跡でしかありません。新しく生まれ変わって、私たちは全く新しい人生を、全く新しい人として歩むことが出来るようになりました。それは私たちに神の命が、イエス・キリストの命が与えられたからです。『神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。』永遠の命を私たちは与えられました。この命によって私たちは永遠の神と交わることが出来るようになりました。永遠の命がなければ、私たちは永遠の神と交わることも出来ません。永遠に断絶された者でしかなかったわけですから。永遠の滅びが待っていた、ただそれだけの者でありました。でも、今はイエスを信じるその信仰によって永遠の命が与えられました。そしてイエスを信じる者同士、神の子どもたち、主にある兄弟姉妹、神の家族として私たちは永遠の繋がりを持つようにされました。素晴らしい恵み、祝福です。

ここで『生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。』とあります。生んでくださった方、というのは勿論父なる神ですが、神を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。その方によって、父なる神によって生まれた者とは、勿論クリスチャンもそうですけれども、ただここは単数ですから一人の人です。これはイエス・キリストのことです。18 節を少し先取りして皆さんに見て欲しいと思います。

『¹⁸ 神によって生まれた者はだれも罪の中に生きないことを、私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守っ

ていてくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。』神から生まれた方、とはイエス・キリストのことです。後でまたここは見ますけれども、ですからもう一度 1 節の方に目を戻して頂いて、『生んでくださった方を(父なる神を)愛する者はだれでも(クリスチャンはだれでも)、その方によって生まれた者(すなわち御子イエス・キリスト)をも愛します。』父を愛するものは、御子を愛する。これもヨハネのテーマでありました。ヨハネの福音書の中に何度となく、父と子は 1 つであって、父を愛する者、父を敬う者は、父が遣わされた者である御子イエス・キリストをも愛する、信じるんだということを、繰り返し繰り返しヨハネの福音書の中にも述べられておりました。ですから、クリスチャンの特徴、クリスチャンのしるしというのは、だれでもイエス・キリストを愛するというものです。イエス・キリストを愛していない人は、いくら神を愛すると言ってもその者は真のクリスチャンではありません。「私はクリスチャンです。」とエバの証人は言います。「私はクリスチャンです。」とモルモン教徒は言います。「私はクリスチャンです。」と統一協会員は言います。でも、彼らは皆イエス・キリストを愛していません。口では何とでも言うかもしれませんが、私たちは、イエスは神の御子、子なる神、三位一体の第二位格として愛しているわけです。「でも、神によって生まれた者は、父なる神よりも低いお方じゃないですか。レベルが父よりも低いのではないですか。」そのように思う者たちもあるかと思えます。実際にエホバの証人はそのような主張をいたします。「イエス・キリストは神によって造られたもの。神から生まれた者だから、要するにエホバよりも低い者。イエスは神ではありえない。」と、そのような主張をいたします。

コロサイ 1:15 を参照して頂きたいと思います。よくこれはエホバの証人が持ち出す箇所です。「イエス・キリストは神から生まれた者、神によって造られた者だから、神よりも低い者である。」と、そのような主張をする時にこのコロサイ 1:15 がよく使われます。『御子は(イエス・キリストは)、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。』エホバの証人はこのような個所をもって「イエス・キリストは神ではない。神によって生まれた者。すなわち造られたものである。」と。ところが、その次の節を見て頂くとそれが全くの誤解であることがハッキリします。『¹⁶ なぜなら、万物は(すべてのものです。)御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は(すべてのものは)、御子によって造られ、御子のために造られたのです。』御子イエス・キリストは、すべてのものを造られたのです。ですから、もしエホバの証人が主張するように、御子イエス・キリストは神によって造られたものだとすると、御子イエス・キリストはこの万物の中に含まれなければいけません。全くそうだと 15 節と 16 節は矛盾するわけです。でも、万物は例外なく、もれなく御子イエス・キリストにあって(または、よって)造られたとあります。すべては御子のために存在していると、造られたのだと。そこを突かれると痛いので、エホバの証人の人たちは聖書を改ざんいたしました。改変したわけです。16 節の“万物”というところは、“万物”とそのまま訳さずに、ある言葉を加えました。すべてのものという箇所ですけれども、そこに“他のすべてのものは御子によって造られた”と。うまく訳していますね。でも、“他の”なんて言葉は勿論原文にはありません。勝手に付け加えているわけです。でも、“他の”がないとエホバの証人も行き詰まるわけです。万物の中にイエス・キリストも含まれていなければいけないはずなのに、どうして 16 節は“イエスが万物を造った”と。「困ったなあ、どうしよう。これでは、イエスが神であることが証明されてしまう。」ということで、「“他のすべてのもの”と、これで良いじゃないか。」ということで、それが新世界訳聖書という彼らの作り出した、改ざんされた偽物の聖書に、まことしやかに書かれております。でも、そのような“他の”という言葉は、どのギリシャ語の聖書の写本を見ても載っておりません。明らかに彼らは、付け加えたのです。そして、これは絶対にやってはならないことです。

いずれにしてもクリスチャンならばイエス・キリストを信じております。この「信じる」という意味は幅がありますけれども、先週見た内容で思い出し欲しいと思います。イエス・キリストは神であり、人である。100%イエスは神です。そして同時に 100%イエスは人です。キリストの神性と人性、両方を信じる者が真のクリスチャンです。片方だけ信じる者、片方を否定する者がおります。エホバの証人も「イエスを信じる。」と言います。でも彼らは、イエスがただの人である、若しくは神に造られた御使い、大天使ミカエルが肉をとって、受肉してイエスとなったと。あくまでイエスは神ではないと。その意味においてエホバの証人はイエスを信じております。でもそれは、真のクリスチャンではないとい

うことが、ハッキリとこの手紙の中で宣言されております。

またキリスト教系の異端に限らず、他宗教においても「イエスを信じる。」と言う人たちがおります。イスラム教徒も「イエスを信じる。」と言います。彼らの聖典、經典のコーラン(クルアーン)と言います。その中に、**コーラン 112 章 1 ～4 節**にこう書いてあります。『**言**ってやるがいい。彼はアラー、唯一のお方であられる。アラーは自存され、生まないし、生まれたのではない。彼に比べうる何ものもないと。』アラーという唯一神をイスラム教徒は信じていると言います。一般的にも唯一神信教というのは、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教と言いますが、イスラム教は唯一神信教ではありません。ただ 1 人の神しか信じないと、彼らは言いますが、実際にアラーというのは 250 以上もある多神教の神々のうちの 1 つです。月の神、月の女神です。その月の女神がいつの間にか(アラーと言ったんですが)男性の神に性転換させられて、そして他のすべての神々を駆逐して、暴力で他の多神教の人たちを皆駆逐して、そして昔から唯一、昔から自存していた永遠の存在であるかのように祀り上げて、それを今のイスラム教というかたちに作り変えたわけです。実際に彼らが先祖と言っている、父祖と言っているアブラハムという人は、元々は月の神を信じた異教徒だったんです。でも、神はアブラハムに声をかけられて「**あなたはあなたの故郷を出なさい。そしてわたしが示す地へ行きなさい。**」という召命を与えて、アブラハムは、イスラムの先祖であるはずのアブラハムは、メソポタミアで信奉していたカランの月の女神を捨てて、月の神を捨てて、言い換えればアラーを捨てて、そして多神教から聖書の神、イスラエルの神、唯一の神を信じる信仰に至って、そして私たちの信仰の父となったわけです。ですから間違ってもイスラム教は唯一神の教えだと思わないで欲しいと思います。一般的にはそう言われます。そう主張されますけれども、確かにコーラン(クルアーン)にも、アラーは唯一であると。だれも生まない、生まれたものではないという言い方をします。

しかし、聖書には、今見ている**第一ヨハネ 5 章**のところには、私たちの信じる聖書の神は唯一まことの生ける神ですが、この方は父なる神として永遠に^{わた}亘り存在しておられます。そしてこの方がお生みになった子なる神、神の御子イエス・キリストも永遠に亘り存在し、そしてこの方の御霊、キリストの御霊とも呼ばれるもの、聖霊なる神も永遠の昔から存在されております。人間のちっぽけな頭ではとても計り知れない、とても調和の出来ない大きな方であります。それが三位にして一体の神。三位一体の神であります。

話を戻したいと思います。父なる神を愛する者は、子なる神イエス・キリストを愛するのだ。それがクリスチャンであることのしるしである、証拠である、特徴だということでもあります。それ以外は皆偽物だということ覚えて欲しいと思います。エホバを愛すると言ってもイエス・キリストを愛さないならば、その者は真のクリスチャンではありません。私たちは神を愛していますと、クリスチャンですと、何と自称しようともイエス・キリストを愛していない者は、皆偽り者です。皆異端者です。皆偽物です。

そして、**2 節**に『**2 私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。**』神を愛すれば愛するほど、神の言葉、神の約束、神の戒め、神の命令を愛するようになります。そして、その命令は勿論(皆さん、言われなくても分かると思います。)あの『**シエマの朗読**』にもあります。『**心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。**』『**あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。**』これもまた等しく大切な戒めになります。端的に言うならば、**神を愛し、人を愛する**。それが神の命令です。それが神の御心であります。特にここでは、**神の子どもたちを愛する**。すなわち、クリスチャンを愛するというのが言われております。『**あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。**』と。互いに弟子たちの間で、クリスチャン同士で愛し合いなさい、ということもイエスによって命令されておりました。ですから、これももう一つのクリスチャンのしるし、証拠として、クリスチャンであるならば、本物のクリスチャンであるならば、その者は神の子どもたちを、すなわちクリスチャンたちを愛するものである。「私は神を愛しています。イエス・キリストを愛しています。でも、クリスチャンたちは嫌いです。教会は偽善者の集まりじゃないですか。あんなところに行きたくはありません。教会に行くと却って苦しくなります。教会に行けば却ってトラブルに巻き込まれるんです。傷つきたくないんです。教会に行けば疲れます。」とか、そういう人たちが本当にクリスチャンかどうか疑わしいと

思います。神を愛すれば、神の命令も愛します、大事にします。私たちがどう感じようと、私たちは神が望まれていることを行うものであります。それが神に最も喜ばれることだということを知っているからです。神の子どもたち、クリスチャンを愛するということ。神を愛すれば愛するほど、神の子どもたちを愛するようになります。親だけ愛して子供たちを愛さないということはないと思います。**神は愛です。神は愛也**、とも言われています。神の本質は愛なんです。ですから愛に欠けているという状態は、まさに神との関係がどこかがずれている、どこかが歪んでいる、どこかがおかしい。そのように疑わなくてはなりません。クリスチャンを愛せないと思っているならば、どこかがおかしいんです。何かが違っているはずであります。

ヨハネの福音書 13:34~35、お読みしますので聞いて下さい。『³⁴ あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。³⁵ もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。』』クリスチャン同士が愛し合っていればこそ世の人たちは「ああ、この人は確かにキリストの弟子だ。なぜならば互いに愛し合っているから。互いの違いを超えて、性格も趣味も、まったくバックグラウンドも異なっているのに、国籍すら違うのに、それでも愛し合っている。肌の色も違うのに、他民族なのに、お互いに愛し合っている。年齢を超えて、性別を超えて、本物の家族以上にこの人たちは愛し合っている。この人たちはキリストに属する人たちだ。すなわちクリスチャンだ。」と。なぜならばキリストがそのような方だからです。キリストは選り好みはしませんでした。だれでも愛されました。罪人も愛されました。取税人も遊女も、罪人と呼ばれているすべての人たちを愛され、罪人の友となられたお方です。究極的には、ご自分を鞭打ち、そして釘で両手両足を十字架に釘付けにしたあの死刑執行人のローマ兵たちをも愛されました。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか自分で分からないのです。」と、十字架の上でイエスは彼らの命乞いをしたのです。自分の命乞いをしたではありません。彼らが永遠の滅びに至らないように、「このままでは彼らは地獄へ落ちてしまう。どうか彼らをお救いください。」と。お赦し下さい、お助け下さい、お救いくださいと。それが、私たちのイエスの姿です。ですからイエス・キリストにつく、イエス・キリストに属する、イエス・キリストに繋がっている、イエスを信じている者は、イエスを主としている者は、すなわちクリスチャンは皆、イエスのようであるわけです。私たちは互いに愛し合うべきです。互いに愛し合っていないならば、互いの間に愛がないならば、私たちはもはやクリスチャンと名乗ることは出来ないはずで。自称クリスチャンはいけません。他の人たちが見て、ノンクリスチャンのあなたの家族があなたを見て「この人は本当にクリスチャンを愛している。教会を愛している。だからクリスチャンなんだ。」と。「バプテスマを受けたから、洗礼を受けたから、ただ単に日曜日礼拝に集っているから、だからこの人はクリスチャンだ。聖書を読んでいるようだからクリスチャンだ。」ではありません。そうではなくて、本当にノンクリスチャンの周囲の人たちに自分がクリスチャンであることを認めてもらいたければ、あなたは他の誰よりもクリスチャンを大事にすべきであります。互いの間に愛があつて初めてあなたはキリスト者としての証しを立てることが出来るんです。ノンクリスチャンの家族にも親切にしなければいけません。「親族を顧みない者は、不信者よりも悪い。」とパウロは言いましたが、それはもう最低限の話であります。でもそれ以上に私たちは神の家族を大事にしなければいけません。そうするとあなたの肉の家族は不可思議に思うと思います。血も繋がっていないそんな人たちにどうしてそんなに献身的に仕えることが出来るのか。何のメリットもないはずなのに。または、他のクリスチャンがあなたを愛する時に、ノンクリスチャンのあなたの家族はびっくりします。どうしてこんなに親身になって、他人なのに。これが最もパワフルな証しであります。お互いに愛し合う時に、ノンクリスチャンですらそこにキリストの姿を見るわけです。できればイエス・キリストの姿を現わしたいとあなたが切に願うならば、是非他のクリスチャンを愛して下さい。「人をつまづかせてばかり。私を見ると皆つまづいてしまうんです。とてもクリスチャンとは思えないとか、そういうことばかり言われるんです。あなたの中からイエス・キリストが見えてこない。キリストの香りなんか全然しない。」そういうことがよく聞かされるならば、今一度クリスチャンを愛することを始めて欲しいと思います。

そしてまた第一ヨハネ 2章 18~19節も参照して頂きたいと思います。『¹⁸ 小さい者たちよ。今は終わりの時です。

あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。それによって、今が終わりの時であることがわかります。¹⁹ 彼らは(反キリストたちは)私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら(言い換えれば、クリスチャンであったのなら)、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためなのです。』真のクリスチャンであれば、教会の中に留まります。勿論教会というのは、1つの地域教会だけを限定して指しているものではありません。このマラナサ・グレイス・フェロシッパから出て行った人たちは、全員反キリストだと言っているわけではありません。でも彼らは、いろんな理由があって出て行ったと思いますけれども、でもどこかの教会に繋がっていれば、勿論クリスチャンでありますから私たちは何も否定的な思いを持って彼らを見ることはありません。でもここを出て行ってどの教会にも行かないということになると話は別であります。場合によっては彼らは元々最初から救われていなかった、クリスチャンではなかったという可能性が高くなるわけです。勿論だからと言って、彼らが地獄に落ちるとか、神の怒りや裁きの対象になるということではありません。単純に彼らが救われていなかった、そのことが証明されただけです。であるならば、福音を宣べ伝える必要があるということです。「クリスチャンだからもう分かっているはずだ。」と思ったら大間違いなんです。何も分かっていたなかったわけです。ですから改めて彼らをノンクリスチャンと見て、ベーシックな福音のABCを伝えていく必要があるわけです。分かっているつもりだと、クリスチャンのはずだと、そういうことだと私たちのアプローチは間違うかもしれません。クリスチャンであればこそとか、クリスチャンのはずなのにとか、クリスチャンだったらどうしてみたいな、そういうことで私たちは振り回されてしまいます。傷ついてしまいますから、ここに書かれているように、クリスチャンであれば必ず神の家族と行動を共にします。家出はしません。家出したとしても戻って来ます。でも、出て行ったまま二度と戻って来ないということになれば、最初から家族ではなかったということです。最初からクリスチャンではなかったということです。彼らは反キリストたちであり、すなわちキリストに反抗する者であり、またキリストに取って代わろうとするような者たちであります。特にヨハネの手紙が書かれた背景に、この反キリストというのはグノーシス主義という異端をもたらした者たちであります。彼らは「教会は偽善者の集まりなんだ。」と。「だから我々はもう二度と教会には行かない。既存の教会には行かないんだ。」と。「我々にはグノーシスという特別な知識がある、啓示がある。そんな世俗化した教会や、偽善者の集いなんかに行かないで我々の中で集まろうではないか。家で教会を開こうではないか。」これも注意したいと思います。彼らは神を愛していない者たち、イエス・キリストを愛していない者たち、神からは程遠い人たちであります。

次に 5 章 3 節に目を移して下さい。『神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。』神の命令は、先にも触れましたように神を愛すること。また、神の家族、神の子どもたち、クリスチャンを愛すること、と言いました。4 章の終わりのところにももう一度目を戻して頂きたいと思います。神を愛するというのは、口では何とでも言えます。愛というものも、神というものも目には見えません。ですから、中々本当にどれだけ神を愛しているか、分からないようにも思うんですけども、4 章 20～21 節にこう書いてあります。『²⁰ 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。²¹ 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。』神を愛しているかどうかを測るバロメーター、それは兄弟、姉妹、クリスチャンを愛することによって測られるということです。愛は計測可能なんです。その人のことをどれだけ愛しているのか。簡単に分かります。どれだけの犠牲を払っているか。目に見えない神を愛しているかどうかは、目に見える兄弟、姉妹、クリスチャンを愛することによって分かります。そして、そのクリスチャンを愛するというのは、犠牲によって測られます。神は私たちをどれほど愛されているのか。ひとり子イエス・キリストを与えるほどにです。これ以上の犠牲はないというものを、命の代価をもって私たちを愛して下さいました。私たちはその愛を持って互いに愛し合うべきですと、このヨハネは述べております。そして、これが命令という形でもありますので、愛していればその人の言うことを聞きたいと願うものです。「あっ、これは命令だ。やらなければいけないこと。義務だ。律法だ。戒めだ。」と言って、がんじがらめに堅苦しく嫌々ながら渋々行うというものではありません。神を愛していればこそ、神様の言いつけならば何でも聞きたい、従いたい。愛から出ているわけです。愛

がない者には、この命令は重荷でしかありません。この「**重荷**」という言葉は、「悲しみ。嘆く。」というふうにも訳せる言葉です。神の命令を聞くと「ヘビーだ。重過ぎる。きつすぎる。痛すぎる。」そう思っている人たちは、神を愛していません。勿論簡単ではない命令もいっぱいあります。でも神を愛していれば、あなたは喜んで自分をそのために捧げるはずであります。「私には難しい。この命令を守るためには大きな犠牲が強いられる。でも私は神を愛しているから、喜んでこのために犠牲になりたい。このために自分を捨てます。このために私はすべてを捧げます。」と。重荷とはなりません。悲しみ、嘆きにはなりません。実際のところ私たちは先に神様から愛されておりますから、改めて神を愛すると言っても、もう既に神からいっぱい愛されているわけです。愛をもう既に知っているわけです。既に愛を受けているわけです。ですから、それほど難しいとは思ってはいけません。イスラム教徒はメッカに向かって 1 日に何度も何度もひれ伏して礼拝を捧げなければいけません。神を愛する時にはそういうことまでしなければいけないわけですが、私たちはそんなことをする必要は全くありません。私たちはいつでもどこでもこの神を愛することが出来ます。兄弟を見つけたら、姉妹を見つけたら、その者に愛を示すことによって、いつでもどこでもどんな小さな形で神を愛することが出来ます。そして、それはそんなに難しいことではありません。

4 節に『なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。』クリスチャンは世に打ち勝つ者たち、勝利者であるということもここに宣言されています。クリスチャンは敗北者ではありません。クリスチャンは負け犬ではありません。どうして下ばかり見ているのでしょうか。どうしてまるで敗残兵のように落ち込んで、しけ込んでいるのでしょうか。あなたはクリスチャンではありませんか。あなたは世に打ち勝った者です。勝利者なんです。勝利者らしく顔を上げて、真っすぐに立って歩まなければいけません。どうやってこの世に、「この世」というのは勿論この世のシステムということです。サタンが支配するこの世のシステム、具体的にそれらが例えば誘惑となってあなたに襲いかかってきます。プレッシャーとなってあなたを苦しめるわけですが、それらにあなたは打ち勝つんです。どうやって。信仰によってです。信じることによって。勿論「**信じること**」というのは、ただの信心ではありません。単純にイエス・キリストを信じること、信頼することによってです。イエスがあなたにとってどのような方であるのか、そのことを信じて下さい。そうすることであなたは勝利出来ます。ありとあらゆる誘惑に対して、ありとあらゆるプレッシャーに対して勝利出来ます。

ヨハネの福音書 16:33 に『わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。(クリスチャンであれば避けられないことがあります。この世に生きている限り患難があるんです。)しかし、**勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。**』イエスの言葉です。確かに患難は避けられません。確かに試練は、後から後から繰り返し繰り返しあなたの人生に起こってきます。誘惑も日常茶飯事です。しかし、それらの中にあってあなたは世に打ち勝つことが出来ます。なぜならば、あなたは世に打ち勝たれた勝利者であるイエス・キリストを信じているからです。あなたの内には勝利者であるイエス・キリストがおられるのです。キリストが内住しているんです。パウロは**コロサイ人の手紙**で、この内住するキリストのことを「**栄光の望み**」と言いました。Hope of glory.キリストの内にあるということ。これは栄光の希望であると。私たちに希望があるんです。負けてばかり、つまずいてばかり、逃げてばかり、繰り返してばかり。「がっかりしました。自分でも自分が情けないんです。嘆かわしいです。」でも、あなたの内には栄光の望みがあるんです。希望があるんです。イエス・キリストがあなたの内に住んでおられることを今一度信じて下さい。「この方は私たちと同じように人となられたけれども、私たちと同じように試練に遭われたけれども、誘惑にも直面されたけれども、サタンから直接攻撃を受けたけれども、それでも罪を犯すことなくすべてに勝利された。世に打ち勝ったお方だ。最大の敵である死にも打ち勝ったお方である。その方が、福音書のイエス・キリストが、あなたの内に、私の内に住んでいるんです。これが私たちの栄光の望み、希望であります。自分の内にイエス・キリストがおられるということを信じるならば、あなたは希望に輝くようになります。勝利者であることを自覚するようになります。いつまでも負け犬ではない、敗北者ではない。同じような罪ばかり繰り返すような、何の成長も遂げていないような未熟者ではないということに気がきます。**ピリピ 1:6**にもこういう言葉があります。『あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまで

にそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。』あなたの内に神は良い働きを始めて下さっております。まだ完成まではほど遠いと思うかもしれませんが。言い換えればキリストの似姿に、キリストと同じ姿に変えられていくそのプロセスの中で「私はイエス・キリストには似ても似つかないほど遠い存在だ。」と、あなたは今自覚しているかもしれません。でも既に神はあなたの内にこの良い働きを始めて下さっております。栄光から栄光へとキリストと同じ姿に変えて下さる。これは主の御霊の働きであるとも言われています。あなたの働き、あなたの仕事ではないんです。これは神の仕事ですから、希望を持って下さい。あなたが一生懸命自分で自分を律しながら、罪汚れから離れて自分の意思の力で誘惑に打ち勝とうとして、聖人君子になろうと一生懸命背伸びして、片意地張って、立派な敬虔なクリスチャンのように見せようと、振る舞おうと、様々なパフォーマンスをしても、あなたはいつか疲れて、いつか失敗します。いつかボロを出します。そして自分自身にも幻滅します。あなたが働くではありません。神が働くのです。あなたの内におられるキリストが働くのです。御霊が働くのです。そのことを信じて下さい。そうすればあなたは決して敗北者にはなりません。常に勝利者として自覚を持つことが出来ます。誘惑に勝利されたイエス・キリストがあなたの内に住まわれている、内住されているということを、絶対に忘れないで下さい。自分を見れば敗北者、敗残兵、負け犬でしかありません。ただの弱い者です。本当に罪深い者です。生まれながらに御怒りを受けるべき、地獄に落ちて相当の者です。でも、そんなあなたの内にイエス・キリストが住んでおられるということ。イエス・キリストを信じる者には、イエスがその人の内に住んで下さるということを私たちは信じています。信じていればこそあなたは絶対に勝利者となれるわけです。

5 章 5 節に今度は移って行きたいと思います。『世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。』世に勝つ者とはだれでしょう。勿論これは、イエスを神と信じるクリスチャンということなんですけれども、やっぱり信じることによって打ち勝つのです。律法を行うことではありません。戒律主義で、禁欲主義で、私たちは勝利するものではありません。シンプルなんです。世に勝つ者とは単純に、イエスを神の御子と信じる者です。イエスを神の御子と信じない者たちは、残念ですけども常に敗北者です。イエスを神の御子と信じる者に敗北者は 1 人もありません。クリスチャンには敗北者は 1 人もありません。「私は敗北者です。私は負け犬です。」と、そう思ってもそれは事実ではありません。聖書によればあなたはイエス・キリストを神の御子と信じているならば、世に打ち勝った者です。勝利者です。それが事実です。それが真理なんです。サタンはあなたにありとあらゆる偽りの言葉であなたを惑わそう、いろんなことを吹き込んであなたを聖書の真理から、約束から引き離そうとするかもしれません。「それでもクリスチャンか。また同じことをやって。そんなことではもう神からの愛も祝福も受けられない。お前に待っているのは罰と呪いだ、祟りだ。」と、いろんなことを言われて「もうお前はクリスチャンとして相応しくないから教会にも行くべきではない。よくそんなことをしておきながら、平気で聖書を開いて祈れるものだ。賛美なんか歌えるものだ。」と、いろいろなことをサタンは、私たちの敵は吹き込んでくるかもしれませんが、決して耳を貸してはいけません。聖書の言葉が真理ですから、嘘偽りに耳を貸してはいけません。クリスチャンは勝利者であります。

第一コリント 15:57を参照したいと思います。『しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。』自分で勝ち取った、もぎ取った勝利ではありません。神に感謝すべきです。それは勝利者である主イエス・キリストによって与えられた、授与された勝利だからです。私たちの代表が勝ってくれたわけです。ワールドカップで日本の代表が勝てば、なでしこジャパンが勝てば、私たち日本は世界一なんです。あなたがフィールドで頑張ったんじゃないやありません。なでしこたちが頑張ったわけです。でも私たちは勝利したことになるわけです。素晴らしいですね。私たちの代表イエス・キリストが打ち勝ったんです。ですから私たちは勝利者です。あなたは勿論日本代表のようにフィールドを駆けまわることも出来ないと思います。ボールをあんまりふうには蹴れないと思います。そんな強いフィジカルな面は持っていないと思います。ちょっと歩くだけで、もうぜいぜい言ってしまうとか。ルールすら分らないんです。何ですか、サッカーって、知りません。とか、そういう人もいるかもしれませんが、いずれにしても私たちの代表は勝ってくれたわけです。私たちは勝利者です。そのことを信じて下さい。

黙示録 21:7『勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。』私たちは勝利者として栄冠を与えられます。報いというものも受けます。ですから期待して下さい。勝利者には報いが待っているんです。褒賞があるんです。冠が待っているんです。表彰台に立って私たちは沢山の祝福を受けることが出来ます。ですから決して絶望的になってはいけません。私たちには内住のキリストがおられます。私たちの内には、この神の命、キリストの命、永遠の命が与えられています。あなたが弱くても、あなたの肉体が衰えても、外なる人が衰えても、内なる人はますます強くなっていきます。キリストに似てくるようになります。かつて地上でキリストが歩まれたように、あなたも歩むことが出来るようになっていきます。すぐにはそれは起こらないかもしれませんが。でも徐々に段階的にでもキリストが愛されたように、隣の人をあなたはもっと愛することが出来るようになると思います。キリストが愛されたように家族の一人一人をあなたは愛することが出来るようになると思います。絶対に許せなかった人も赦せるようになると思います。とても自分の能力ではかつてはこんなことは出来ませんでした、ということも実は出来るようになっていきます。いつも昔は、クリスチャンになる前は、私は負けてばかりいました。罪しか犯すことが出来なかったんです。でも、今は違います。今はそれが罪だということも分かります。今はその罪と戦おうとして葛藤しているということも今私には分かります。かつては罪とも思わずに、葛藤すらしなかったわけです。でも今はそのことすら体験出来るわけです。そして葛藤で終わらずに、克服も出来るわけです。素晴らしいですね。そのことを期待して下さい。

テキストに戻って頂いて、今度は**第一ヨハネ 5:6**『このイエス・キリストは、水と血によって来られた方です。ただ水によってだけでなく、水と血によって来られたのです。そして、あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです。』この「水と血」というフレーズ、単語は、キリスト教系の当時の異端のグノーシス主義を意識したものであります。グノーシス主義の教えによれば「目に見えるもの、物質は、または肉体はすべて悪である。目に見えない霊だけが善である。」という二元論を彼らは説いていたわけですが、例えば私たちは肉体を持っていますから肉はすべて悪いもの。そして、その悪いものを克服し除去して救われていくためには肉を打ち叩く。すなわち禁欲主義に走るといって、1つの結論があるわけです。もう一つは、肉は悪いもの。でも霊とは何にも関係もない。ですから肉において何をしても霊には何の影響も与えないわけだから、やりたい放題好き放題やればいい。所謂放縦主義へと導くわけです。グノーシス主義はそのように2つの極端な生き方を生み出すわけです。キリスト教系の異端もすべて同じ極端な2つのライフスタイルを生み出します。1つは一言で言えば禁欲主義、律法主義というものです。もう一つは放縦主義、欲しいままに振る舞う、または無律法主義というものです。そのグノーシス主義の神学によれば、イエス・キリストが最高の神のかたちということでイエスは神であると。ただ、イエスは人間ではあり得ない。なぜならば、肉はすべて悪いものだから。イエスが人の姿をとって地上におられたのは、人間の目にはそのように見えただけに過ぎないと。苦し紛れのいろんなことを彼らは説くわけですが、そのグノーシス主義の中で、この「水と血」というのはキーワードとなっていました。かつてナザレのイエスという人は、水に入る前、すなわちバプテスマのヨハネから水の洗礼を受けるまでは、水のバプテスマを受けるまでは、ただの人であった。でも、水に入ってから、天から神の御霊が、聖霊が鳩のようにこのナザレのイエスの上に降^{くだ}って、イエスはその時から神になったと。これがグノーシス主義の教えであります。彼らの用語を使うならば、「キリスト意識を持つようになった」ということです。ただのナザレのイエスから、キリスト意識を持つようになった。その瞬間に神になったということです。でも実際のところは、ナザレのイエスは処女マリヤの内に宿っている時もずっと神です。バプテスマのヨハネから洗礼を受ける前から、ずっと神です。でも洗礼を受けた時には、確かに聖霊が上から降りました。でもそれは、これから公生涯、公宣教、パブリック・ミニストリーに入るにあたって力を受けるためでした。聖霊のバプテスマを受けて、その聖霊の力によってイエスは神の栄光を現わすということをするようになります。それが3年半の生涯でありました。聖霊が上から降ったんです。イエスはこの聖霊の力を受けてサタン^{サタン}の誘惑にも打ち勝って行ったわけですが、またありとあらゆる奇跡を行い、神の驚くべき恵みの教えを説いたわけですが、でもグノーシス主義者は、イエスが水のバプテスマを受けたその時にイエスはキリスト意識を持って神となったんだと。しかし、同時にグノーシス主義者は「血」という言葉もキーワードとして使

いますが、イエスが、キリストが十字架刑にされた時、イエスは十字架上で「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。エリ・エリ・レマ・サバクタニ」その時にイエスは神から見捨てられたのだと。すなわち血を流された時、十字架刑にされたその時に、イエスは神ではなくなり、また元のただの人、ナザレのイエスになったんだと。水のバプテスマを受けた瞬間にナザレのイエスは神となり、十字架刑にされたその瞬間にイエスは再び神ではなくなってただの人間になった。これがグノーシス主義の教理であります。実際にそういう教理を教えているカルトは今でも存在します。イエスが十字架上で「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と、その瞬間にイエスは神でなくなったと、そういうことを説くグループがあります。でも、そのイエスの十字架上の苦しみを一部始終見ていた死刑執行人の責任者であったローマの百人隊長は、イエスが息を引き取ったその直後に「この方はまことに神の子であった。」と信仰告白をしています。十字架上のイエスの苦しむ姿を見て、残酷極まりないあの百人隊長が、イエスを直接手にかけた死刑執行人たちが、「イエスこそ神の子であった。」本物の神だという信仰告白をするに至ったわけです。そんなことを公でしたら自分の職を解かれるかもしれません。また自分自身も十字架につけられてしまうかもしれない。でもそんなことも気にせず、百人隊長は公の場で「この方はまことに神の子であった。」と、皆に聞こえる声で公の場で信仰告白までしました。イエスは十字架上で神でなくなったのではありません。実際に「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」というあの言葉は、ただの断末魔ではなくて、**詩編 22:1**の引用でありました。それはダビデの賛歌という、その讃美歌の1節であります。それを引用したんです。そこにはイエスがまだ生まれる前、1千年も前の預言として、来たるべき約束のメシアは十字架刑される、という非常に具体的で細やかな鮮明なグラフィカルな十字架刑の苦しみがあらかじめ預言されていたその箇所です。ですから**詩篇 22 篇**はメシア詩篇と呼ばれるところで、イエスはその**第1節**の冒頭の句を引用して、今十字架のこの私の身に起こっていることはすべて1千年にダビデが預言した**詩篇 22 篇**のこの出来事が実現しているんだと、成就しているんだということを人々に証しするためだったわけです。賛美をしながら証しをしたわけです。決してその瞬間神でなくなったというわけではありません。確かにすべての罪を、私たちのあなたの罪をイエスは十字架で負われましたから、その瞬間イエスは神から引き離されました。でもそれだからといってイエスは神でなくなったのではありません。神として死んだのです。人として死んだのです。私たちのすべての罪を罪のない方が全部負って下さったのです。罪を知らない方が罪となられたのです。それは私たちが神の義となるためです。それが真実であります。グノーシス主義はすべてのこの聖書の真実を、真理を歪めて、取り違えて私的解釈をしているわけです。

もう一つヨハネがここで述べている「水と血」というのは、水はバプテスマ。そして血は十字架の死というふうにも言いましたけれども、イエス・キリストは確かに神でありながらも人として来られた。出産する時には、羊水と血が必ず流れるわけです。ですから水と血で来られたというのは、神が人となって、聖霊によって処女マリヤのうちに宿って、そして来られたというそのイエスの人性というものも述べています。前節の**5 節**では、イエスが神の御子だと言いました。でも**6 節**では、イエスはその神の御子でありながらも水と血で、すなわち人の姿をとってこの世に赤ちゃんとして生まれて来て下さった。勿論それは死ぬために。私たちの罪を十字架で負うために生まれて下さった。その意識はもう生まれた時から持っていました。赤ちゃんの時から、胎児の時からイエスは死ぬためにこの世に来られたということを、元々キリスト意識というものを持ってこの世に来られました。それについては**ヘブル書**の中に確かに書かれています。赤ちゃんの時からイエスは神でした。赤ちゃんの時からキリスト意識を、すべての罪を贖うために十字架にかかって死ぬということを覚悟して来られたわけです。

グノーシス主義というのは現代のキリスト教系の異端の中に息づいております。エホバの証人も然り、モルモン教も然りであります。そうしたすべての異端、またはカルト、他宗教もそうですが、特徴としてキリストを常に過小評価します。キリストを小さくするのは。縮小するのは。キリストは神ではあるかもしれないけれども人ではない。または、キリストは人であるかもしれないけれども神ではない。いずれにしてもそれはキリストを縮小することです。過小評価することです。イエス・キリストは100%神であり、100%人であります。それ以上でもそれ以下でもありません。これ以下にするものは皆異端です。皆異教です。皆カルトです。そしてもう一つそのカルトの特徴として、ただキリストを小

さくする、縮小するだけではなくて、真の神から遠ざけるという冒瀆を行います。神から遠ざけるのがすべての異端の、カルトの特徴であります。

そのことを御霊が証しするとありますけれども『あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです。』と。この真理の御霊は、真理の御言葉を書いたお方です。いま私がお話したことはすべて聖霊によって書かれた聖書の中に見出すことが出来ます。聖書の中に見出せないような教えは、すべて異端です。非聖書的、反聖書的な教えは、すべて偽りです。どんな大きな組織であろうと、有名な組織であろうと、それが本やセミナーで語られていたとしても、聖書に書かれていないならば、それはすべて間違いです。すべて異端です。ですから『あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです。』と。常にあなたの内に住む聖霊の声にも耳を傾け、そしてその聖霊が書いた神の御言葉にも目を留めて欲しいと思います。それによって私たちは真理と偽りを見分けることが出来るということも、これまでの学びで見てきました。

次に 7 節、そして 8 節をお読みしたいと思います。『あかしするものが三つあります。⁸御霊と水と血です。この三つが一つとなるのです。』この 7 節 8 節というのは、昔から議論を呼んでいる箇所であります。“コンマ・ヨハンネーム”と呼ばれる箇所です。日本語に訳すと“ヨハネの聖句”ということです。特にこの 7 節 8 節は、昔から議論を呼んでおります。聖書のバージョンによっては、正確に言うとき写本によっては、今私たちが読んでいるものとは全く違うことが書かれております。違うと言っても、私たちが見ているものよりもっと多くの言葉がこの 7 節 8 節に含まれております。逆に私たちの聖書は省かれているということです。省略されてしまっているということです。写本によってここが違うわけですから。その写本の違いの中で重要なものとして、前から皆さんにお伝えしているものがあります。それは写本の中では最も数の多い、大多数のものである『公認本文』^{ほんもん}というもの。英語で言えば“received text”。これは受け入れられているテキスト、本文ということです。公認というのは public ということです。本文というのは text です。その写本は『ビザンチン写本』とも言えますけれども、その写本は数の上では最も多いのです。どうして数が最も多いかというと、それだけ信用されて、受け入れられて、世界中で普及していたからです。ただし、それよりも古い写本が発見されてきました。数は少ないです。そして、その古い写本の中には、その『公認本文』の中にあるものがあるわけですから。そして学者たちはこのように考えました。「写本の年代が古ければ古いほど原本に近いに違いない。」皆さんはお分かりだと思いますが、聖書の原本というのは今は存在しません。ヨハネが実際に書いたそのオリジナルは、オリジナルのテキストは、今は存在しないのです。存在しているのは、それらを写した写本だけです。そして、その写本が年代的に古ければ古いほど間違いが少ないというふうにも考えますから、原本に近いんだ、原典に近いんだ、というふうに考えるわけです。ただし、その数が少ないというところが問題であります。古いから数も少ないに違いないというふうにも思ってしまうかもしれませんが、それらは数が少ないだけではなくて、それらは一部の地域で、特にグノーシス主義というものが隆盛していた地域で見つかったものばかりです。グノーシス文書という古代の文書があります。そうした文書と一緒に見つかったりするわけです。そして、グノーシスというのは、その当時イエスは神なんですけれども人ではないということを、特に強調していました。その逆も全く同じ異端です。イエスはただの人間であって神ではない。イエスの神性、人性どちらかを否定する。それが異端であったわけですが、その異端のグループが活躍している場所で古い写本が発見されたわけです。でも年代的に古いから原典に一番近いに違いないだろうということで、これまでは大多数のその『公認本文』というものを聖書の底本として、ベースとして使って、それをいろんな言葉に訳していったわけです。ギリシャ語の写本を例えばラテン語にしたり、またはそれをドイツ語や英語や、そして日本語にしたりという作業をするんですけれども、でも古いものが見つかったもので、そちらに合わせなければいけない。そうすると実は多くの部分が除かれてしまう、排除されてしまう、省略されてしまうということが起きてきたわけです。そのいろいろな問題・議論を呼び起こしているのが、この第一ヨハネ 5 章 7 節 8 節“コンマ・ヨハンネーム”というところなんです。ヨハネ句と呼ばれるものです。ちょっと難しい話であり飲み込めなかった人もいるかもしれませんが、その『公認本文』という最もポピュラーだった、今の時代ではそれらは逆に疑わしいもの、後から後の時代に付け加えられたなんていう烙印を押されていますけれども、ちょっと前まではそれが絶対的な権威をもつ

て多くの聖書で受け入れられていた写本だったんですけども、その中には**7節8節**に私たちの聖書には全くない言葉が含まれております。今その全くない言葉を皆さんにお伝えしますので聞いて下さい。メモを取れる方はメモして下さい。**7節**には私たちの聖書は『**7 あかしするものが三つあります。**』と、短い文章で終わっています。でも『**公認本文**』と呼ばれるものの中には『**7 天において証しするものが三つあります。父、ことば(御言葉)、聖霊です。これらは一つです。**』となっているんです。そして、続く**8節**は私たちの聖書では『**8 御霊と水と血です。この三つが一つとなるのです。**』と短いんですけども、『**公認本文**』の方では**8節**に『**8 地において証しするものは、霊(御霊)と水と血です。この三つが一つなのです。**』と。共通する言葉もありますが、除外されてしまっている言葉もあります。その『**公認本文**』の聖書をどうやって私たちは自分で読むことが出来るのでしょうか。そう思われる方は、英語の欽定訳聖書、または新欽定訳聖書を開いてみて下さい。King James version または New King James version それを見て頂くと、今私が読み上げた言葉がそのまま英語で表記されています。

『**7 天において証しするものが三つあります。父とことば(御言葉)と聖霊です。これらは一つです。**』勿論この“ことば”というのは、命の言葉と呼ばれているイエス・キリストのことです。すなわちここでは三位一体の神をこれ以上ないというほどにパワフルに宣言しているわけです。聖書の中に三位一体の神をこれ以上鮮明に打ち出している箇所は他にはないと思います。父、御言葉、聖霊です。これらは一つです。三位一体の神の教理をハッキリとヨハネは打ち出しているわけです。そして**8節**の方には、『**8 地において証しするものは、霊と水と血です。この三つが一つなのです。**』**8節**のところには『**地において証しするもの**』という言葉が抜け落ちているというだけなんです、**7節**は充分抜け落ちています。充分除外されて省略されてしまっています。『**公認本文**』というものによれば、この**第一ヨハネ5章7節**は三位一体の神を立証する最重要聖句となっているわけです。“コンマ・ヨハンネーム”議論を呼ぶはずであります。イエスが神ではない、またはイエスが人ではないというグノーシス主義のグループでは、とても受け入れ難い聖句です。ですから古代のグノーシス主義のグループでは、どこか人里離れた^{ひとけ}人気のない荒野かどこかで、誰も人が行き来しないようなところで偶然にもグノーシス文書が見つかって、その中には古い新約聖書の写本も見つかるわけです。そうした写本には、これらの言葉が含まれていないわけです。『**7 天において証しするものが三つあります。父とことばと聖霊です。これらは一つです。**』三位一体の神を否定する彼らは、そこを意図的に除外したと私は考えています。そういうものが発見されて「これが一番古いんだ。だから原典には元々『父、御言葉、聖霊』なんていう言葉はなかったんだ。後からイエスを神と祀り上げようとした人たちが後付けしたんだ。新しい写本にそれがあるということは、まさに後代の人たちがイエスを神に仕立て上げて、このような言葉を挿入したに違いない。」という結論を出してしまいました。それが本文批評という神学の世界で議論されているところでもあります。でも、私はそうは思っていない。

この**7節8節**に欠けている言葉は確かに初期の写本にはありませんが、他にも初期の写本には見られないという聖句が存在します。“コンマ・ヨハンネーム”だけではありません。ヨハネの福音書8章に姦淫の現場で捕えられた女の赦しの部分、その物語、皆さんよく知っているはずですが。実は初期の写本には、このヨハネ8章の姦淫の女とのやりとりというのは一切含まれておりません。抜け落ちているんです。ですから聖書によってはその部分が除外されて、または但し書きとして新改訳聖書もそうになっていますが、初期の写本にはこの物語はなかったと。でも、あまりにも有名で愛されているストーリーなので敢えてそこに加えているわけです。

そして、もう1箇所。全部で4つあります。マルコの福音書16章15節も初期の写本には含まれていなかったんだと。そこには奇跡だとか異言といったものが伴うという、そういう中々懷疑主義者においては受け入れ難い内容が書かれております。これも初期の写本にはなかったんだと。

そして、ローマ8:1。皆さんもよく知っている箇所です。その全部ではないですが、やはり一部は初期の写本には含まれていません。『**キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**』という皆さんがよく知っている聖句ですが、それだけではないんです。『**公認本文**』の方には『**キリスト・イエスにある者、すなわち肉に従って歩まず御霊に従って歩む者が、罪に定められることは決してありません。**』となっているんです。抜け落ちている部

分というのは、『すなわち肉に従って歩まず御霊に従って歩む者』という部分が『公認本文』にはあるんですが、初期の写本にはありません。そして新改訳聖書にも、勿論口語訳聖書にも、また新共同訳聖書にもありません。また英語の聖書でも New International version や New American standard 他のバージョン。King James version だとか New King James version 以外の聖書にはそれらは含まれておりません。

そして 4 つ目が、今見ている私たちのテキストの“コンマ・ヨハンネーム”というところです。第一ヨハネ 5 章 7～8 節の部分です。三位一体の教理を最も鮮明に打ち出しているという箇所です。これら 4 つの箇所はすべて初期の写本には含まれていないというのが、本文批評の人たちが結論付けているところです。ただ、私はこれら 4 つを取り上げて非常に興味深い発見をしました。ヨハネ 8 章、姦淫の現場で捕えられた女がイエスによって罪赦されて驚くべき恵みによって「もはやわたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは罪を犯してはなりません。」という素晴らしい赦しの宣言、驚くべき恵みが示されたその箇所は省かれているんです。驚くべき恵みが説かれているその箇所が省かれているんです。恵みによって救われる。恵みによって赦される。「否、そうじゃないんだ。そんな姦淫なんか犯してはいけない。自分を律してきよい正しい生活を送らなければ、人は救われないんだ。奇跡だとか、異言だとか、そんな超自然現象、そんなものは信じない。(マルコ 16:15 の言葉)」意図的にそうした箇所を省きます。また、キリスト・イエスにある者が罪に定められない。肉に従って歩まずに御霊に従って歩む者は罪に定められない。「クリスチャンならば何をしたらって赦される。犯したい放題。恵みという罪のライセンスをもらっているんだ。何でもごめんなさいすれば赦される。肉に従って歩もうとも、後で告白すれば、懺悔すれば赦される。」そういう人たちは、『肉に従って歩まず、御霊に従って歩む』という言葉は気に障るので除外します。また「三位一体の神なんか信じられない。』『天において証しするものが三つある。父とことばと聖霊。これらは一つです。』「これはちょっと受け入れ難い。三人の神が一人になるなんて、 $1+1+1=3$ のはずなのに、1なんて考えられない。そんなのは受け入れ難い。イエスが人である、または神である、そんなのは受け入れ難い。」意図的に除外します。それが私は真実だと思っております。「初期の写本だから、古いから信憑性が高い。」そう思ったら大間違いです。数が絶対的に少なく、一部の地域でしか用いられていません。

その一方で、確かに年代は新しいです。でも数が絶対的に圧倒的に多いのが『公認本文』です。そして、その『公認本文』は received text ありとあらゆるところで受け入れられていますから、世界各地で使われていたわけです。最もポピュラーだったわけです。なぜ新しいかという、古い必要はないわけです。常に沢山写本されて印刷されていきましたから、一部の人たちだけが後生大事に持っているというものではなくて、古くなったらどんどん新しい写本を作っていったわけです。いつまでも古いものをボロボロになるまで使っていたのではなくて、どんどん信者も沢山使いますから印刷されていくわけです。印刷と言っても写本されていくわけですが。そういう意味で『公認本文』は確かに最も信憑性が高いものとしてありとあらゆる地域で用いられていたわけです。それが年代的に新しいからといって、必ずしもそれが「原典に忠実ではない。あとから付け加えたもの、書き換えたものだ。」というような批判を受けるのは不当だと私は思っております。残念ながら私たちが使っている日本語の聖書、新改訳聖書も新共同訳聖書も口語訳聖書も、また他の個人訳もすべてそうですけれども、公認本文を底本とはしておりません。英語の聖書でも世界中で普及している NIV(New International version) というものもそうです。そうしたものも底本は公認本文ではありません。公認本文を底本としているのは、英語の欽定訳聖書 King James version または新欽定訳聖書 New King James version それだけです。ギデオンの配布している新約聖書の対訳の中には日本語の新改訳と、そして英語で New King James version 新欽定訳を使っているものがあります。でもそれは、対訳ではないんです。対訳というのは、日本語と英語とを比べたらそっくりそのままであるというもののですが、そうではないんです。見て頂ければ分かりますけれども、新改訳には無い言葉が沢山 New King James version の中には見られます。その一方で NIV の対訳は、大体似ています。新改訳にしても、また NIV (新国際訳とも言いますが) それらはほとんど同じです。そして、もっと言えばエホバの証人が使っている新世界訳という改ざんされた異端的な聖書も、実は私たちの使っている新改訳とそっくりそのままです。また新共同訳、または口語訳とも、そっくりそのままと言っていると思います。た

だ一部は書き換えられている事は否認できませんけれども、今私が批判した部分、特に“コンマ・ヨハンネーム”三位一体の神を鮮明に表すんだと、それは公認本文にはそうはあるんだということを私は説きましたが、エホバの証人も三位一体を否定していますから「確かにそうだ。公認本文は時代が新しくて、後から三位一体の神の教理を証明するためにいろんな人たちが付け加えたんだ。」と。それが真面目に神学をしているプロテスタントの神学者たちと全く同じ主張だということが、私にとっては悩ましいことです。残念なことです。異端と全く同じ考え方を持ってしまうわけですから。

この話は、興味が私には尽きないですけれども、そのために何時間も話さなければいけないので、この辺で終わりたいと思いますけれども、ヨハネ 8 章、マルコ 16 章 15 節、ローマ 8:1、第一ヨハネ 5 章 7~8 節、それらは確かに初期の写本にはありませんけれども、もう一つだけ言っておきたいことがあります。初期の写本よりもっと古い初代教父と呼ばれる人たちは、沢山の説教を残しております。それらは文書になって写本になっています。それらの古代文書は、実は初期のギリシャ語の聖書の写本よりも年代的にはもっと古いものです。そして、それらの初代教父の説教の中に、今言ったヨハネ 8 章の姦淫の女のやりとりの物語も、マルコ 16 章 15 節の異言だとか奇跡のその聖句も、またローマ 8 章 1 節の聖句も、また第一ヨハネ 5 章 7~8 節の“コンマ・ヨハンネーム”とされているその箇所もすべて実は初代教父たちの説教の中で引用されて、説教の題材となって使われているんです。何が言いたいかと言いますと、確かに写本としては公認本文は新しいのですが、公認本文は実は初代教会の教父たちが使っていたテキストだったということです。それは初期の写本よりもっと古いんです。この事実も見落としてはなりません。年代のことだけで言うならば、実は公認本文は初代教父たちが使っていたテキストであるということ、初期の写本よりもっと古いんだということが証明されています。そして、その初代の教父たちは、グノーシス主義を頭から非難しているわけです。そのグノーシス主義者たちの使っていた聖書は、今日のエホバの証人の人たちと同じように改ざんされたものと言わざるを得ません。それはずっとどこかに密かに隠されていたので、最近見つかって「これが新しい発見だ。」とか、「ユダの福音書が見つかった。これが真実だ。」とか、平気でそういうことをまことしやかに言いますけれども、まったくもって論外です。全く聖書の写本のことも、聖書学も全く無知な人たちの発想でしかありません。いずれにしても、これらの 4 つ抜け落ちている、初期の写本にはないという箇所は、どれを 1 つとっても全部力強いパワフルな聖句です。驚くべき神の恵みを証する、ヨハネの 8 章もそうです。または人間の力によらない御霊の力によって、超自然的なパワーによって神の働きがなされていくんだというそのマルコ 16 章 15 節もそうです。そして、すべてキリスト・イエスにあるものが罪に定められることはない。それは肉に従って歩まず御霊に従って歩む者。そして、三位一体の神を立証する『天において証しするものが三つある。父とことばと聖霊。これら三つが一つなんだ。』という、すべて重要な教理ばかりです。すべて人生を変えてしまうような大切な聖句ばかりです。これらが意図的に抜け落ちているのは、私には異端が背後にあったとしか思いようがありません。

「じゃあ、私たちはグノーシス主義者だとかエホバの証人たちが使っている同じような聖書を使っているのですか。それは問題じゃないですか。新改訳は使うべきではないのでしょうか。NIV は使うべきではないのでしょうか。」と思う方もいると思いますが、私はそんなことは気にしません。あなたが読める聖書を読んで下さい。「英語、読めないんです。」日本語で結構です。ただ、今お話したことは心に留めておいて下さい。今皆さんが使っている聖書は、翻訳された聖書に過ぎません。原語で書かれているものでもないです。しかも写本が、ありとあらゆるものがあるということを考えて下さい。つまり絶対的なものではないのです。でも、あなたの内には絶対的なものが与えられています。それがあなたの内に住む聖霊です。聖霊がこの翻訳聖書、この新改訳も使って下さいます。聖霊が働けば、極端なことを言えば新世界訳ですらイエス・キリストが神であることを立証することも出来るんです。だからといって、その聖書を使って下さいとは言いませんが、それが真理の御霊が成してくれることです。私たちの知性で、頭で聖書を学ぶのではないのです。聖霊が私たちに神の言葉を解くのです。ですから大学教授が、神学教授が本文批評をして「あーでもない、こーでもない。」といろんなことを言って聖書を研究しています。朝から晩まで没頭しています。それで大学からお金をもらっています。それで本を書いて印税で暮らしています。でも、彼らは何も分かっていないので

す。彼らの内には聖霊がいないからです。キリストが住んでいないからです。あなたは何の学歴もないかもしれません。ヘブル語もギリシヤ語も何も分からない、英語も分からない、日本語も分からないという人もいますかもしれません。でも、関係ありません。イエス・キリストを信じているあなたには、真理の御霊が生きて働いて下さいますから、あなたを必ず真理へと導いてくれます。そのことを信じて下さい。その方に頼って下さい。「どうもカズの話はさっぱり分からないんです。難しい言葉をよく使うし、専門用語が多いし、よく分かりません。」御霊に聞いて下さい。聖霊があなたに必ず必要な真理を与えて下さいます。あなたに分かるようにして下さい。今分からなくても、後に分かるようにして下さい。それが聖霊の働きであります。ですから、どんな聖書でも使って頂いて一向に構いません。新改訳だろうと、口語訳だろうと、文語訳だろうと、何でも構いません。ちなみに明治の元訳というものは公認本文を使っていました。あれば是非欲しいと思います。明治の元訳。大正訳というものもありますけども、今の文語訳ではありません。今の文語訳はそんなに古い物ではありませんから、ただ言葉だけを古くしているだけで、底本は違います。明治の元訳、貴重な本ですが、お持ちの方は大切にして下さい。そこには日本語のバージョンで公認本文が翻訳されています。

話を戻しますけれども **8 節**に『**霊と水と血**』とありますけれども、**霊**というのは勿論聖霊も指しますし、私たち人間の内にも霊があります。**ローマ 8:16** に『**私たちが神の子どもであることは(クリスチャンであることは)、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかしして下さいます。**』私たちの内に住む御霊が、私たちの霊とともにあかしして下さい。キリストの御霊が、内住のキリストが、あなたの霊とともに「**あなたが確かに神の子である。誰がなんと言おうとも、あなたがクリスチャンである。**」ということを証明してくれます、証ししてくれるのです。私は、私がクリスチャンであるということを科学的に証明することは出来ません。でも、私は知っています。私が、自分が、クリスチャンであるということを。人がなんと言おうと。「やあ、あなたはそれでもクリスチャンですか。全然牧師っぽく見えませんね。本当にクリスチャンですか。」と、そう言われたとしても、私は自分がクリスチャンである、神の子どもであるということを確認しています。それは、私の霊が御霊とともにあかししてくれるわけです。皆さんも同じです。あなたがどう感じようと、あなたのフィーリングがどうであろうと、人がなんと言おうと。「私はどうも自分がクリスチャンとは思えないんです。本当に救われているかどうか、神の子どもなのか時折首をかしげてしまうことがあるんです。クリスチャンならこんなことは言わない、こんなことはやらないはずなのに、私はこんなことも言ってしまう、あんなこともやってしまうんです。本当に自分はクリスチャンなののでしょうか。救われているのでしょうか。」あなたには分かります。御霊があなたとともにあかししてくれますから。

水というのは、これは水のバプテスマを表しています。水のバプテスマを受けることであなたが確かに神の子どもであるということが証しされます。どうして野尻湖の冷たい水にあなたは沈められたのでしょうか。何があなたをあの水の中に沈めたのでしょうか。だれも好んであの水の中に全身沈められたいと思う人はいないと思います。何があなたを駆り立てたのでしょうか。それは、やはり御霊の働きです。あなたではなくて、御霊が働いてあなたは受洗へと導かれていくわけです。人から言われた、命令された、プレッシャーをかけられた、ではないはずです。

血というのは、聖餐式を表しています。Holy Communion。キリストの肉を食べ、キリストの血を食べる。そういうことが**ヨハネの福音書**にも書かれておりますが、私たちはイエス・キリストがなされたことを覚えて、これを記念して、これを祝って、これを感謝して受けるわけです。「**私のために、私の罪のために、イエスは血を流された。私のために死んでくださった。**」そのことで私たちは自分が神の子どもであるということを知ります、確証します。

霊、それはあなたの内に住む御霊とあなたの霊がともにあかし。 **水**、それは水のバプテスマによって私は、この洗礼に導かれたのは、私の思い、私の感情、私の意志ではなく、これがキリストの命令でもあり、これが御霊の促し・導きだからである。 **血**によるもの、聖餐式です。血を飲むたびに、杯を飲むたびに私たちは、イエス・キリストが私の罪のために死なれたということを確認出来ます。これによって私たちは自分が神の子どもであるということを確認します、確信します。この 3 つがクリスチャンであることを証明するものであるというのが、地であかしするものです。

9 節。『もし、私たちが人間のあかしを受け入れるなら、神のあかしはそれにまさるものです。御子についてあかし

されたことが神のあかしだからです。』当然のことです。私たちは、人間のあかしは簡単に信じます。人間のあかしをあなたが簡単に信じるのであれば、神のあかしを信じて下さい。天から父は「これは私の愛する子。私はこれを喜ぶ。」と、イエス・キリストのことをあかしして下さいました。そして、イエス・キリストは私たちに対して「私はあなたを決して捨てない。」と、何度も何度もあかしして下さいしております。例えば私が妻に、今晚フランス料理か何か、懐石料理か何か、何でもいいですけども、豪華なディナーと一緒に食べよう。夕食に誘うとします。でも妻は「否、そんなの信じない。どうも疑わしい。そんなことあり得ない。」「今晚、君と一緒にフランス料理を食べたい。愛を語りたい。だからディナーと一緒に。」「否、そんなの信じない。絶対にあり得ない。」「いつまでも妻が「信じない。信じない。あり得ない。あり得ない。」と疑って最後まで生涯「信じない。信じない。」で通したならば、彼女は生涯ディナーには与りません。馬鹿らしい用例だったかもしれませんが、私たちはいとも簡単に人のあかしならば信じます。「今晚ディナー、どこか美味しいところに。」「はい、喜んで。」それでいいわけです。ですから私たちも人の言うことを、人のあかしをそんなに簡単に信じるならば、神のあかしをもっと信じなければいけません。

10 節に『神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです。』私たちの感情だとかフィーリングは一切関係ありません。『¹¹ そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。』いのちは御子のうちにあります。“いのち”という言葉は「人生」というふうにも訳せます。あなたの命は、あなたの人生は、御子のうちにあります。

12 節に『御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。』この言葉はヨハネの福音書 3:36 にも見られる言葉です。『御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。』イエスの神性を信じない者、イエスの人性を信じない者は、この命を持っておりません。命は、100%神であり 100%人間であるイエス・キリストのうちにあります。このイエスを信じない者、このイエスを持たない者は、神の子どもでも、永遠の命を持つ者でもありません。

13 節に『私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。』よくわからせるためですと。あなたの感情ではなくて、あなたがどう感じるかではなくて、あなたが知って分かるようになるためです。救われている気分にするためにこの手紙が書かれたものではありません。あなたが確かに救われていることを知らせるため、分らせるため。自分が本当に神の子どもであるのだということがよく分かるために、この手紙は書かれました。永遠の命、救いの保証は成されています。

14～15 節も見て下さい。皆さんもよく知っている聖句です。『¹⁴ 何事でも神のみどころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。¹⁵ 私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るのです。』神の御心にかなわない願いは、幸いなことに神様は耳を閉じてくれている、聞かないようにしてくれます。それは私たちを愛しているからです。神の御心にかなわない願いというのは、偏^{ひとえ}に私たちに害をもたらすものであります。私たちの首を絞めてしまうものばかりです。有害となるものを私たちは願うわけです。それを神は愛していますから、敢えて耳を塞いで聞かないわけです。皆さんの若い頃を思い出して下さい。若い頃と言っても、信仰生活における若い頃、まだ未熟だった頃、18 歳、24 歳、43 歳、65 歳いくつでもいいですけども思い出して下さい。その頃あなたが願った祈り、思い出して下さい。あなたはあの頃、若かりし頃、また霊的に未熟だった頃、どんな祈りをしていたでしょうか。それを思い出せば、震えがきますと言う人もいるかもしれません。とんでもないことを私は祈り願い求めていましたと。恥ずかしいです、と言う人もいます。もしあの時の祈りを神が額面通り聞き留めて応えてしまったならば、今頃私はとんでもないことになっていたと言う人もいます。幸い神様は、神の御心、すなわち私たちにとってベストになる事しか聞き留めて下さらない、かなえて下さらないということです。神の御心とハーモニー、調和する時、一致する時、神は速やかに喜びを持ってその祈りに応えて下さいます。

神の御心にかなう願いは確かにかなえられる。これは分かります。でも、分かっているだけであなたが願わないならば、求めないならば、祈らないならば、いつまでもそうならないということも覚えて下さい。多くの人はこのことを知っています。神の御心だけが成ると。神の御心にかなう祈りは確かに応えられる。それは分かりますと。でも分かっているだけで祈らないという人がいます。ヤコブ 4:2 に『あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。』という言葉があります。頭で分かっているだけではダメなんです。願わなければダメなんです。

ヨハネ 16:24 もお読みします。『あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。』ブルーなクリスチャンがいるでしょうか。意気消沈している、鬱状態のクリスチャンがいるでしょうか。全然喜びがない、そういう人たちはおそらく祈っていない人たちだと思います。少なくともここで言う、イエスの名によって祈る、求める。そうすれば受けるんです。そうすると喜びが満ち満ちたものとなるのです。イエスの名によって祈るというのは、神の御心にかなう祈りということでもあります。その祈りを捧げる者は常に喜びに満ち満ちるのです。何故あなたの内に喜びが満ち満ちていないのでしょうか。「ちょっと喜ぶことがあります。ちょっとせせら笑うようなこともあります。でも、満ち満ちているというところまでは行っていません。ブルーなんです。落ち込んでいるんです。しよげちゃっているんです。すっかり意気消沈してしまっています。鬱なんです。」と言うクリスチャンは、ほとんどと言っていいほど祈っていないと思います。イエスの名によって祈って下さい、求めて下さい。そうすればあなたの喜びは必ず満ち満ちるという、この聖句を約束として受け止めて下さい。神は私たちのお父さんですから、子どものことを一番よく分かっています。私たちにとって一番最高のものしか与えません。有害になるものは絶対に与えません。足を引っ張るようなものは絶対に与えません。神との関係を阻害するようなものは絶対に与えません。誘惑になるようなものも与えません。

詩篇 66 篇 18 節。『もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。』もしも私の、あなたの心に抱く不義が、言い換えれば罪があるなら、主はその祈りを聞き入れてはくださらない。あなたが今罪を犯しているならば、あなたは今主に反抗しているならば、主から遠ざかっているならば、神の御心よりも自分の意志に固執しているならば、神の御心よりも自分の願い・願望・欲望、そうしたものに駆られているならば、その祈りは応えられないということを知って下さい。何故でしょうか。神様が怒るからでしょうか、むかつくからでしょうか。だから応えないのでしょうか。そうではありません。何度も言うように、神は愛なんです。愛の神なんです。ですからあなたにとって有害になるようなこと、あなたの足を引っ張るようなこと、あなたを汚すようなこと、あなたにとって大きな損失となるようなこと、またはあなたの周囲に対して。そういうことを主は望んでいません。ですから「私は罪を犯しているから、いくら祈ったって応えられないんだ。神は私のことを嫌っているに違いない、怒っているに違いない。私に意地悪しているに違いない。」そう思ったら大間違いです。そうではないんです。逆なんです。神はあなたを愛して止まないんです。だからこそ、あなたの罪の中で願う事は全て御心を損じている事です。敢えて応えないんです。それだけの事です。「私がいくら祈っても応えてくれないから、私はそんな神なんか信じない。」とんでもない誤解です。逆に神の怒り、それはすべてイエス・キリストが負って下さったということを私たちは知るべきです。罪を犯してその結果神が私たちに怒って滅ぼしても、それは文句のつけようがないことです。でもその罪に対する神の聖なる怒りは、義なる憤りは、すべて罪の無いお方イエス・キリストが代わりに十字架で負って下さったことを知るべきです。ですから神はあなたのことを怒っていません。罪を犯したって神はあなたのことを怒っていないんです。苦々しくも思っていない。勿論神は愛ですから悲しむこともあるでしょう。でも、だからといってあなたを見放すことは絶対にありません。祈りが応えられないというのは、裏を返せば神の愛の証です。どれほど神があなたのことを愛しているのか。祈りが応えられないことで確認して下さい。「祈っても答えがないので、私は祈るのをやめました、諦めました、もう祈りたくありません。」罪があるのではないのでしょうか。

また別の事実として第一ペテロ 3:7、これもあなたの祈りが応えられない時の理由であります。『同じように、夫たちよ。妻が女性であって(忘れないで下さい。妻は女性なんです。)、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。(「聖書には、妻は夫に従え、と書いてある。お

前は従っていないじゃないか。」でも、ここには、夫が妻を尊敬しなさい、とあります。ですから、そう言われたら、ここを持ち出して下さい。「あなたは私を尊敬していますか。）」それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。』これが今ポイントにしたいところです。祈りが妨げられる、その理由があるんです。特にここでは文脈上、夫が妻を尊敬しない、敬わない、愛さない時、いくら夫が祈っても応えられません。つまり夫婦関係に問題がある時、いくら祈ってもその祈りは応えられないということ。祈りが応えられない時、クリスチ안의夫婦であれば特に「私たち夫婦は今どうだろうか。夫婦関係はどうだろうか。私は妻を尊敬しているだろうか、愛しているだろうか。」逆に妻は「夫を敬って愛しているだろうか。」考えてみて下さい。何故祈りがちっとも答えられないのか。いろいろな理由、原因がありますけれども、これもひとつの原因であります。妻を愛さなければ、あなたの祈りはいつまでも妨げられたままであります。「祈りが妨げられて聞かれないから、もう祈るのをやめよう。」ますます夫婦関係は悪化していきます。

マタイの福音書 5:23 に『²³だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、²⁴ 供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。』祭壇に来て供え物を捧げようとする時、これは言い換えれば主の前に出て祈りを捧げる時、賛美を捧げる時、礼拝する時と考えて良いと思います。その時に、誰かに恨まれているなと思ったら、その兄弟その姉妹と仲直りをしなさいと。祈る前、賛美する前、礼拝する前に、この兄弟この姉妹と何かトラブルっている、恨まれている、傷ついているとか、いろんな否定的な思いを与えられてしまっているならば、仲直りをするように、和解をするようにということなんですけれども。祈る前に誰かに恨まれているなんていうことを考え始めたら、私は多分一生祈れなくなってしまうかもしれません。賛美をする前に、礼拝に行く前に、誰か私のことを恨んでいる人っていないと、いろいろ思い巡らしていたら、あの人もこの人もきっと私のことを恨んでいる、きっと私のことにムカついている。リストアップしていくうちに、今週も来週も再来週も、いつまでたっても礼拝には集えない、そういうことになってしまうと思います。そういうことを言っているのではありません。ここでは明らかに、『もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら』そこで、がポイントです。家で、ではありません。ふと思って、ではありません。そこで。すなわち祭壇の前、主の前、教会で、と言って良いと思います。また祈る時に、そこで思い出したならばです。祈る前に思い出したら、ではありません。教会に来る前じゃなくて、来てから思い出した。その時に。そうでなければ私たちは一生かかっていつまでも祈れない、いつまでも礼拝出来ないという話になってしまいますので、そこで思い出したならば。そうでないと私たちは健全な祈り、健全な賛美、健全な礼拝を主に捧げることは出来ません。それは主には受け入れられないものとなってしまいます。そこで思い出したならば、躊躇なく謝るなり、何かしらのアクションを起こすべきです。そのままにして、放置してはいけません。形骸化した表面的な機械化した祈りや賛美や礼拝をいくら捧げても、それはただの偽善でしかありません。主の御心にかなった祈りを捧げるべきです。その祈りに主が喜んで応えて下さいます。

そして、ヨハネ 15:7『あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。』神の言葉、聖書にとどまるならば、これはキリストのうちにとどまることと等しいことで、それが必ず神の御心にかなう祈りへと私たちを導きます。何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。あなたが聖書の言葉にとどまるならば。もし、あなたが聖書の言葉にとどまらないならば、従わないならば、守らないならば、あなたの祈りはいつまでも神の御心にかなうことはなく、応えられることはありません。今言ったいくつかのファクターというものを、それぞれノートに書きとめて、ことある度に「祈りが全然届かないようだ、聞かれていないようだ、応えられていないようだ、一方通行に感じる。」そういう時に、それぞれのファクターを振り返って「私の心の中に不義はないだろうか。罪はないだろうか。反逆心はないだろうか。利己心がないだろうか。夫婦関係はどうだろうか。仲直りしないといけない人たちがいるのかどうか。御言葉のうちに私は留まっているだろうか。聖書なんか全然読んでいない、学んでもいない。」そういう人がいくら祈ったって、そうそう神の御心にかなう祈りを捧げることは出来ないわけです。神の御心は、神の言葉の中に既に明らかにされているからです。

テキストに戻って頂いて**第一ヨハネ 5:14～16**をもう一度読みます。『¹⁴何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。¹⁵私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。¹⁶だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります。死に至る罪があります。この罪については、願うようには言いません。』ここで書かれていることも議論を呼ぶところでもあるんですけども、ハッキリと「願うようには言いません。」祈るようには言いません。その人のためにはもう祈るな、ということが書いてあります。聖書の中に、祈ってはならない、祈りを禁止するところがあります。その一方で、祈らないことは罪である、とサムエルが言った言葉もあります。でも実は聖書の中に、祈ってはならないということもあるのです。エレミヤ 7:16『あなたは、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫んだり、祈りをささげたりしてはならない。わたしにとりなしをしてはならない。わたしはあなたの願いを聞かないからだ。』聖書の中で初めて「祈ってはならない。」と神が命令した箇所があります。興味深いところです。その前後も読んでみて下さい。テキストの問題として、何のために誰のために祈ってはならないのか。「死に至る罪があります。この罪については、願うようには言いません。」とりなすようには言いません、ということなんですが。では、その死に至る罪とは一体何ですか、ということになるわけですが。ここの文脈上「兄弟が」という言葉が使われています。すなわち、これはクリスチャンが犯す罪です。クリスチャンが罪を犯しても霊的に死ぬことはもはやありません。クリスチャンになる前は、霊的に死んでいた者。それがイエス・キリストを信じることで、その死んでいた霊が復活して、神様と交わりを持つことが出来るようにされたわけですから、もしクリスチャンが罪を犯して再び霊的に死んでしまうとするならば、また元に戻って地獄に落ちるということです。すなわち、救いを失うということです。そういうことは絶対にあり得ないことです。非聖書的な話になりますから、クリスチャンが罪を犯しても霊的に死ぬ、救いを失う。これはありません。キリスト・イエスにある者は罪に定められることは決してない、とローマ 8:1 にもあります。またヨハネの福音書 10:28～30 には、自分の救いを失ってしまうのではないかと恐れている人は、そこを読んで下さい。私たちはキリストの羊としてイエスの御手の中、また父の御手の中でしっかりと守られているということ。ガードされている。誰もイエスの御手から私たちを奪い去るものはいないんだということが、救いの保証として約束されております。ですからクリスチャンは死ぬと言っても、罪を犯して死ぬと言っても、霊的に死ぬわけではありません。救いを失うというような死に方は、もはや死にません。それは第二の死、地獄ということでもあります。これはクリスチャンにはないことです。起こらないことです。でも、クリスチャンでも罪を犯して死ぬ場合があります。ここが、**死に至る罪**ということですが、それは霊ではなくて肉体の死であります。クリスチャンが頑なまでに悔い改めを拒んで罪を犯し続けるならば、死ぬことがあります。死に至る罪があります。文字通り肉体的に死ぬのです。アナニヤとサツピラ、思い出して下さい。信仰者でも死ぬんです、肉体的に。アナニヤとサツピラは、私は地獄に行っているとは思いません。聖霊を騙したわけです。その場で倒れて死んだわけですが、多分天国にいます。

第一コリント 5:4～5 も開いてみて下さい。コリントの教会の中にどうしても性的な罪を改めない者たちがいました。その者たちは、サタンに引き渡されるということを。『⁴あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、⁵このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。』彼の肉が、肉体が死ぬことがあるわけですが、彼の霊が主の日に、携挙の時に新しい体を頂くわけです。救いを失うという意味ではありません。クリスチャンでも頑なに罪を犯し続けて、悔い改めを拒む者たちがあります。その者たちはサタンに引き渡される。具体的には教会から除名されて、除外されて、そしてまるでノンクリスチャンのように扱われるわけですが、でもその時に実際に死ぬこともあります。例えば性的な罪を犯して、HIV 感染か何かをして死ぬことがあるわけですが。だからといって、地獄に落ちるわけではありません。でもそのような肉が死ぬことによって、それ以上罪を犯さなくなるということも一つの憐れみであります。それ以上周りの人たちを巻き込まないで済むということも神の憐れみであります。肉体的に死ぬ。「恐ろしいことです。罰じゃないですか。すべての罰はイエス・キリストが負ってくださったはずじゃないですか。」その通りで

す。第二の死はもうありません。霊的に死ぬことはありません。地獄に落ちることはありません。でも、蒔いた種は刈り取るのです。人は罪を犯せば、必ず蒔いた種は刈り取るのです。ですから罪の結果、それは避けられないことです。

第一コリント 11:27～32も、教会の中で死んでしまうというケースがあります。聖餐式において、病気になる者、死ぬ者もあると。それは聖餐式を全く無価値なものにして、ただのドンチャン騒ぎの飲み会にしまっているから、それによって死ぬ者も出ると。気を付けて欲しいと思います。聖餐式は最も大切にすべきディナータイムです。ディナータイム、しかもそれは私たちの命の恩人である救い主が私たちのために罪のない体を裂き、血を流して下さった、そのことを記念する、最も感謝すべき、最も聖なる大事な時間なんです。それをただの飲み食い、ただのドンチャン騒ぎ、それに^{おとし}貶めてしまうということは、これは冒涇でしかありません。新約の例だけでも、いくらでも挙げられますが、旧約の方はもっと多いです。コラの子たち、そのまま地に飲み込まれました。異なる火を捧げた祭司の息子たちも皆そうです。沢山そういう例はあるんです。肉体的に死ぬということがあります。ウザの罪はどうでしょうか。いっぱいあります。ですから、^{まいきよ}枚挙に^{いとま}暇がありません。これは私たちが知らない話ではありません。クリスチャンの間でも罪の結果、肉体的に死ぬケースがあるんです。だからといって、地獄に落ちたなどとは決して性急な裁きをしてはいけません。これも神の取り計らいだということです。

テキストに戻って頂いて **17 節**、『不正はみな罪ですが、死に至らない罪があります。』**18 節**で『神によって生まれた者はだれも罪の中に生きないことを、私たちは知っています。神から生まれた方（キリスト）が彼（クリスチャンを、私たち）を守ってくださるので、悪い者は（サタンは）彼（私たちクリスチャン）に触れることができないのです。』と。サタンはクリスチャンに触れることは出来ません。クリスチャンは、悪霊に取り憑かれることはありません。一部の教会では、クリスチャンでも悪霊に取り憑かれるんだと説くところがあります。ですから、悪霊追い出しをしなければいけないと、そのような悪習を行っているところがありますが、それは完全に聖書から逸脱した教えであります。私たちの内には聖霊が住んでいます。聖霊とともに悪霊が同居するなんていうことは絶対にあり得ないことで、悪い者が神に打ち勝つということは絶対にないことです。聖霊を追い出すなんていうことは絶対に出来ません。ですから安心して下さい。クリスチャンは悪霊に取り憑かれることはありません。ただし、クリスチャンは悪霊によって惑わされることはあるでしょう。誘惑は受けるでしょう。プレッシャーも受けるでしょう。だからと言って、悪霊に取り込まれる、取り憑かれる、完全に支配される、そういうことは絶対にありません。あなたは守られます。

19 節で『私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。』このこともいつも覚えて下さい。「何故こんな悲劇が、どうしてこんな理不尽なことが、ニュースを見ても心を痛めるばかり、もうこんなニュース見たくもない聞きたくもない、なんでこんな悪いことばかりが、何故こんな良い人たちに、あり得ない。」でも、忘れないで下さい。全世界は悪い者の支配下にあるんです。ですから、だからと言って勿論開き直るわけではないですけども、でもそれが現実なんです。向き合わなければいけないということです。だから私たちは『主の祈り』の中で、『御国が来ますように。』と祈るわけです。この世界が全てではないのです。神の国が来ますように。そして、『主よ、来てください。マラナサ』と祈るのは、このためです。この世界は悪い者の支配下にあるのです。だからこそこんな悲劇があるんです。だからこそこんな災害があるんです。でもその日がすべて終わる、イエス・キリストが王の王、主の主として戻って来て神の国を打ち立てるその時には、もうこの悲劇は終わります。もう涙は拭われます。もう死はありません。

20 節に『しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。（あなたは神様を知ることが出来ます。あなたの知能による、頭脳によるではありません。）それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいます。この方こそ（イエス・キリストこそ）、まことの神、永遠のいのちです。』イエスはまことの神です。イエス・キリストこそが永遠の命そのものです。

21 節に『子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。』イエス・キリストだけがまことの神ですから、それ以外はまことではない偽りの神、すなわち偶像であるということです。クリスチャンでありながらも偶像を持ってしまう人もおります。「む

さばることがすべて偶像だ。」とパウロは言いました。偶像礼拝は何も善光寺に行って参拝することではありません。偶像礼拝は何も仏壇の前で手を叩くことではありません。私たちの心の中にも偶像があります。心の中の欲望、願望、それらが私たちを偶像礼拝へと、すなわち偽りの神を第一としてしまうようなライフスタイルを私たちに送らせる、これが偶像礼拝であります。ですから、警戒して下さい。まことの神は、イエス・キリストのみです。本物の命は、イエス・キリストの内にしか見出せないのです。言い換えれば、本当の幸せ、本当の喜び、本当の希望、平安、満たし、これはイエス・キリストの内にしか見出せないのです。その他の何ものも与えてはくれません。どんな活動も、どんな遊びも、どんな趣味も、どんな学問も、どんな仕事も、あなたに真の命を、真の喜びを、真の満たしを、与えることは出来ません。それらは偽りのもので、偶像であります。イエス以外のものを頼りにしているならば、イエス以上に愛するものがあるならば、すべてが偶像です。偽りの神であります。

今日は、これで**第一ヨハネ**を、最後は急ぎ足になりましたけれども、何とか終わらせることが出来ましたので、是非神の命を経験して、もっともっと豊かに味わって。確かにクリスチャンになった途端に私たちはイエス・キリストから永遠の命を頂きました。御子を信じる者は皆永遠の命を持つのです。でも、持っているだけで全然使っていない。その永遠の命を生きていない。肉の命は生きています。ちゃんと肉にはあなたは餌を与えています。朝ご飯も食べてきたと思います。でも、永遠の命に対してはどうでしょうか。永遠の命をあなたは生きているでしょうか。持っただけで使っているでしょうか、生きているでしょうか。それは別の問題だと思います。もしかしたら、宝の持ち腐れ。もしかしたら、無用の長物となってしまうかもしれません。それは実にもったいないこと。クリスチャンでありながらこの神の命をまだ体験していないという人もいますかもしれません。いつまでも肉のうちに生きているだけ。もったいない話ですから、是非神の命を味わって下さい。神の光、神の愛、神の命、すべてあなたのものです。いつでも、どこでも、それをあなたを体験出来ます。経験出来るんです。御子イエス・キリストを信じる者に与えられた恵み、特権であります。では、今日はこれで終わりたいと思います。